



ムロアジの一夜干しは まぼろしになった

作家
志茂田景樹

伊豆の海辺の村にある母の実家で、僕は生まれた。母は出産のために里帰りしていたので、やがて僕を抱いて東京都下の国鉄官舎に帰った。

国鉄職員だった父は、晩酌の友にアジの干物を好んだ。物心がついた頃から、その光景と、台所から流れくるアジの干物が焼かれる匂いは、僕の日常に溶け込んでいた。ただ微妙に違和感を抱かせた。

それは父が実とうまそうにアジの干物をつつく表情と、それが焼かれるときの不快な匂いからきていた。母が街で買い求めるアジの干物はコチンコチンに硬くて、焼くと立ち上る匂いには魚のものとは違う何か不自然な臭気がこもった。

僕はそのときいつも母の実家の食卓に上がるアジの一夜干しの味と、それが焼かれるときの匂いを思い浮かべていた。

兄妹たちとかなり年が離れた末っ子の僕は、ゼロ歳時から年に数回は両親とともに、また母におぶわれて母の実家を訪れた。母の実家はミカン農家で、浜から少し離れたところにあったが、浜からサイレンの音が響き渡るとバケツを手に浜へ駆けた。

サイレンは地引網を上げる合図で、漁師に限らず地域の人々が手伝いに駆けつけた。叔父はバケツに山盛りのムロアジを貰ってきた。それを叔母が大きなまな板で手際よく開いていった。3、4歳の頃の僕はムロアジが開かれていくのを、すぐそば

でジッと見ていたそうである。開かれたムロアジは、夜になると障子戸ほどもある網に並べて風通しのいい戸外に干された。

そういう光景をまだしっかり記憶できなかった1、2歳の頃でも、僕は、母に言わせると、「おっぱいを吸ったあとで、一夜干しの身をほぐしてあげると、美味しそうに食べていたわねえ」ということになる。

僕は乳離れが遅かった。それはともかく、母の実家で作るムロアジの一夜干しの味と匂いは、幼時から僕の体と心に染みついていたのである。コチンコチンのアジの干物が焼かれる嫌な匂いと、それをうまそうに食べる父の顔は、僕には理解し難かったのだろう。

小学校に上がると、たまたま母の実家に泊まっていたときにサイレンが鳴ると、叔父は浜へ連れていってくれた。地引網の引き綱を地域の人々と掛け声とともに引く快感は今でもよみがえる。やがて、海面にムロアジ

をいっぱい吞み込んだ網の一部が姿を現し、銀鱗がキラキラ日に映えた。

翌朝、ご飯に乗っけて食べる一夜干しの味わいは格別のものであった。

中学2年になってから、母の実家へ行くことはバタリとなくなった。親と一緒にに行けるか、と思う年頃になったのだろう。

硬いアジの干物を、僕は敬遠していた。高校生のとき、そうだ、自分で作っちゃえ、とアジを数尾買ってきて叔母の手際を思い出しながら開いて一夜干してみたが、食べたものではなかった。社会に出てまもなくの頃、親の名代で母の実家で催された法事に出席した。

「一夜干しがないなあ」

僕の不満顔に、叔母が言った。「とっくに浜から地引網は消えたよ。地引網を出したって、もうここではムロアジはかからねえだよ」

あの一夜干しの味と匂いは、まぼろしのものになった。